

英文學評論



『ジョナサン・ワイルド』について(1) 飯 沼 馨

『クラリッサ・ハローウ』の周辺 岡 照 雄

「ハイペリオン没落」序詩をめぐって 松 下 千 吉

ポールの悲劇—『息子と恋人』 奥 村 透

ヘンリ・ジェームズの後期の文体 渡 辺 久 義

三つの女優物語 鳴 原 真 一

京都大学教養部英語教室

目次

『ジョナサン・ワイルド』について(1)	飯沼馨……………(一)
『クラリツサ・ハーロウ』の周辺	岡照雄……………(四)
「ハイペリオン没落」序詩をめぐって	松下千吉……………(六)
ポールの悲劇―『息子と恋人』	奥村透……………(二六)
ヘンリ・ジェイムズの後期の文体	渡辺久義……………(四一)
三つの女優物語	鳴原真一……………(二六)

編集後記

私達の英語教室も、今年は総勢二十五人となった。部内随一の大世帯である。この三月に退官になった宮西光雄・中野正順両先生は、大谷大学と光華女子大学でそれぞれ英文科の主任教授として活躍だが、五月には飯沼馨氏・森清氏がそろって教授に昇進されて陣容が固められた。また、四月の新学期には、京都女子大学から奥村透氏、姫路工業大学から青木次生氏を共に助教授に、大学院から喜志哲雄氏を講師に、六月には大阪女子大学から蜂谷昭雄氏を助教授に迎え、新進気鋭の学究を集めて多士済済を誇ることになった。

教室談話会も七月に酒井幸三氏の「クーパーについて」、九月に岡照雄氏の「デクラレイションとコンヴィクション——戦後英国の一面」と活発に進んでいる。「英文学評論叢書」にも山内邦臣氏の『詩魂と悲劇——ニージン・オニール研究』が加わり、徐々にではあるが確実な歩みを続けている。

LLの運営も順調に始まり、英語教室も他の外国語教室と共に新しい実験活動に参加しているが、教材の研究が進むにつれて将来が期待される分野である。

さて、この夏は例年になく酷暑だったにもかかわらず、執筆陣のご奮闘により、編集は順風に帆をあげる勢いであった。教室の潜在力が多様性のなかにまとまりを秘めて一頁一頁と具象化していくのを見るのはまことに楽しい。

(編集委員)

英文学評論 第十六集

非売品

昭和三十九年十月十五日 印刷
昭和三十九年十月二十日 発行

編集者

京都大学教養部英語教室

代表者 川田周雄

印刷所

内外印刷株式会社

京都市下京区西洞院七条下ル

発行所

京都大学教養部英語教室

京都市左京区吉田二本松町

REVIEW OF ENGLISH LITERATURE

VOL. XVI. October 1964

CONTENTS

<i>Jonathan Wild</i> (1)	<i>Kaoru Inuma</i>
An Approach to Richardson's <i>Clarissa Harlowe</i>	<i>Teruo Oka</i>
On <i>The Fall of Hyperion</i>	<i>Senkichi Matsushita</i>
The Tragedy of Paul Morel— <i>Sons and Lovers</i>	<i>Tôru Okumura</i>
Henry James's Late Style	<i>Hisayoshi Watanabe</i>
Three Novels of Actress: <i>Nana</i> , <i>Carrie</i> , and <i>Oshun</i>	
A Double Repercussion of Literary Naturalism	<i>Shinichi Shigihara</i>

ENGLISH DEPARTMENT
COLLEGE OF LIBERAL ARTS
KYOTO UNIVERSITY